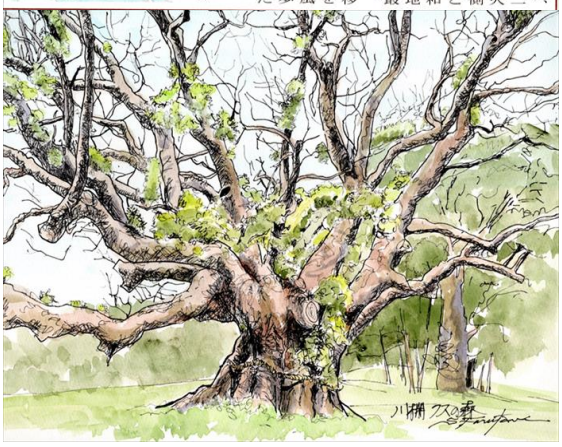
今日のイラスト 518　「 イラストでたどる石州街道② 其中庵 」　　古谷眞之助

イラストでたどる 石州街道 02 其中庵

石州街道から少し離れるが、今回と次回、小郡地区で是非紹介しておきたいところが二つある。その一つは自由律俳人・種田山頭火が住んだ「其中庵」で、津市の道標から西側へ約1キロの雨乞山の麓にある。各地を転々と放浪した山頭火だが、ここに庵を結んだ昭和7年から13年までの6年間、相変わらず各地を放浪しながらも多くの句集も出版して、最も充実した日々を過ごしたと言われている。

山頭火はその後湯田温泉の「風来居」に移り住むから、いつもの通り飄々と石州街道を歩いたのは間違いない。「けふもいちにち風をあるいてきた」「どうしようもない私が歩いている」こんな句も、案外その時に出来たのかも知れないと勝手に思うのも楽しい。

文・イラスト＝古谷眞之助



　コロナの状況を見ながら、そろそろ石州街道ウォークを本格的に開始したいと個人的には思っている。本文にも書いているように、ここ其中庵（ ごちゅうあん ）は、街道沿いにあるわけではないが、出発点小郡の名所として是非とも紹介しておきたいところである。と言って、私が熱狂的な種田山頭火ファンということではない。その文学的功績はさておいても、彼の生きざまそのものには、正直釈然としないものを感じているからである。風来坊として各地をほっつき歩いた彼だが、れっきとした家族がいたにもかかわらず、最終的には顧みることはなかった。ある意味、それだからこそ「自由律俳句」の達人になり得たのかも知れないと思っているくらいである。ただし、私は彼の一生を詳しく追ったわけではないから、これは私の思い込みで間違いかも知れない。以前、川棚温泉に泊まった時にこんな話を聞いた。彼がこの温泉を気に入り、庵を結ぼうとしたものの、土地の人々は氏素性の分からぬ風来坊には冷ややかだった。もし、川棚の人々がもう少し彼に親切であれば、別な意味で川棚は有名になっていたかも知れない、と。書いたのは確か古川薫氏ではなかったろうか。これまた、あまり自信はないのだが。

　川棚で思い出した。川棚には大きなクスノキがある。初めて見た時には青々と葉が茂っていたが、それが一旦枯れそうになって、樹木医などの努力もあって何とか復活しつつあるという。（ 小イラスト ）この木の下に彼の句碑があり、「大楠の枝から枝へ青あらし」と記してある。この句、初めて見た時の印象そのものである。彼の句碑は実に多くある。一説には全国に 600 近くあるという。詳しく防府市にある「山頭火ふるさと館」で尋ねられたい。私の一番好きな句は「分け入つても分け入つても青い山」（ 2022.6.12 記 ）